

2022年上期の牛肉輸出の変化

主席研究員 長谷川晃生

1 22年第2四半期の輸出量が減少

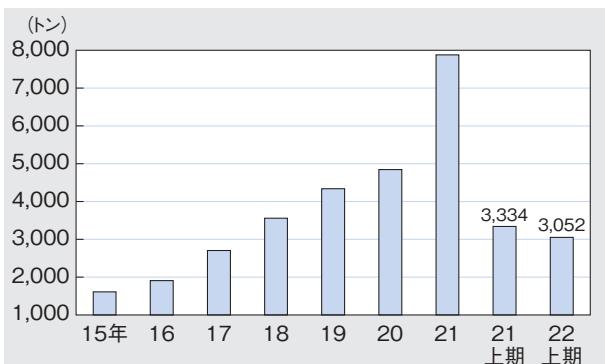
和牛肉の輸出は、国内需要が限定的なロース等の高価格部位の供給先として注目され、コロナ禍でインバウンド需要が消失したなかで、さらに重要性が高まっている。輸出の中心は和牛とみられ、輸出量は2015年の1,611tから21年の7,879トンへと、大きく増加したが、22年上期は21年同期と比べて輸出量が減少した(第1図)。

足元の状況をみるために、19年以降の四半期ごとの輸出量を示したのが第2図である。20年第1～2四半期は主要輸出先でのコロナ感染拡大による需要減退で輸出量が減少した。^(注1)その後は急回復し、21年下期の増加幅が大きく拡大し、21年は過去最高の輸出量であった。22年の第一四半期は、昨年と同水準だが、第二四半期は減少に転じた。

2 カンボジア向けが輸出増減に影響

21年の輸出先別の輸出量割合は、カンボジア(28%)、香港(18%)、米国(15%)、台湾(12%)

第1図 牛肉輸出量の推移



資料 財務省「貿易統計」

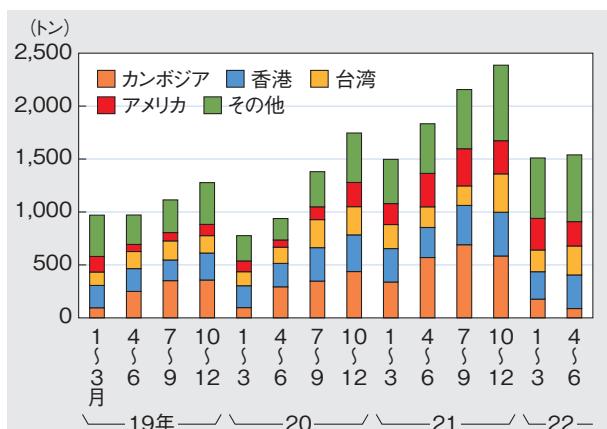
の順である。これらで全体の74%を占め、これまで増加を牽引してきた。

22年第1四半期は、カンボジア(前年同期比△48%)、香港(△18%)、台湾(△10%)が前年同期比で減少となった。また第2四半期は、カンボジア(△85%)、アメリカ(△27%)が減少した。カンボジア向けの減少幅は大きいが、カンボジアを除くと22年も輸出量は引き続き増加している。したがって、全輸出量に占めるカンボジアの割合は、第1四半期は12%、第2四半期は6%へと急低下した。

減少要因は輸出先ごとに異なり、香港はコロナ禍のため実施された外食規制が影響した。アメリカは日本産牛肉に課す関税が大幅に引き上げられたことによる。関税引上げは、アメリカが日本等を対象に設けている低関税輸入枠がブラジル産の輸入急増で22年3月末に消化されたためである。

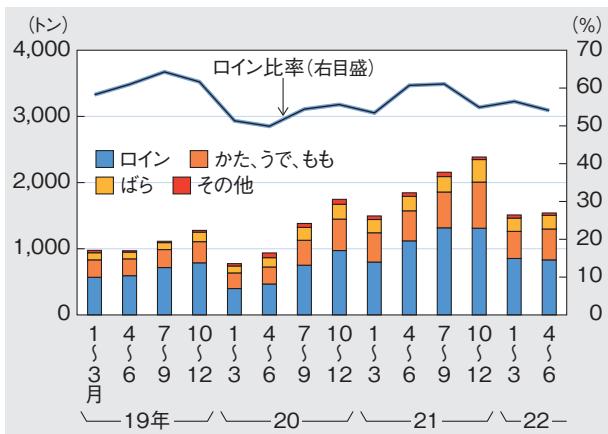
カンボジアに輸出された牛肉の多くは中国

第2図 輸出先別の牛肉輸出量



資料 第1図に同じ

第3図 牛肉輸出量(部位別)の推移



資料 第1図に同じ

等に再輸出されているとされる。新聞報道によると、上海でのロックダウン等の中国におけるゼロコロナ政策が間接的に影響したとの見方がある。^(注2)ただし、日本から中国への農林水産物・食品の輸出額は22年上期に前期比18%増加している。再輸出先の需要変化だけではない要因もあるものとみられ、今後のカンボジア輸出の動向に留意すべきである。

3 部位別の輸出割合に変化はない

これまで輸出量全体に占めるロインの割合は6割程度で推移してきた。21年実績でみると、輸出量のうち58%が「ロイン」で、「かた、うで、もも」が27%、「ばら」が13%を占めた。21年のロインの輸出量が全量和牛と仮定すると、国内の和牛ロイン系供給数量の2割が輸出されていると試算される。^(注3)

(注1)長谷川晃生(2021)「コロナ禍における和牛需給と産地対応」農林金融8月号を参照。

(注2)食品産業新聞社ニュースWeb「牛肉輸出量 2022年上期は前年8.5%減の3052t、カンボジア向けが7割減と大幅減少、制限緩和で欧州・カンボジア向け輸出増加目立つ」、2022年8月1日付。

(注3)公益社団法人日本食肉流通センター(2022)「コロナ禍の食肉をめぐる状況(2022年2月報告)」

22年第1四半期、第2四半期は「ロイン」の輸出割合が56%、54%で、これまでと同程度であった。輸出伸長には、高価格帯だけでなく多様な部位の輸出増が必要とされる。しかしながら、多様な部位を含めたフルセット販売が進展していないことが示唆される。

4 産地での対応が課題

輸出に注力してきた産地のなかには、22年に入ってから輸出量に変化がみられる。東海地方の和牛産地では、コロナ禍長期化で国内外からの観光客による消費回復が遅れ、輸出の伸びに期待しているとしている。21年は輸出量が前年比でほぼ倍増し、22年も3割程度の増加を見込んでいた。

当産地は、カンボジア輸出はないものの、アメリカ向けが半減しているという。アメリカ以外は増加しているが、アメリカの落ち込みをカバーできず、22年通期で前年比微増にとどまるとしている。また、ウクライナ情勢による社会情勢不安等から、EU、東南アジア向けで影響が出てくることを懸念している。輸出が伸び悩むような事態になれば、国内仕向けを増やすことになるが、国内需要が弱いため、販売に苦慮するとみている。

足元の牛肉輸出の停滞は、カンボジア向けの減少が大きく響いている。輸出は、地政学等のリスク、輸出先での需要変動があり、不安定な面がある。和牛産地では、輸出拡大が産地維持に不可欠となりつつあるが、輸出先、輸出部位の多様化を図りながら、輸出に伴うリスクを回避することが求められる。各産地がどのように対応していくか注目していく。

(はせがわ こうせい)